11　番　堀　　口　　　受付番号６番、質問議員11番、堀口恵一。

１．人生100年時代に対応したまちづくりを。

２．Ｊアラート発令時の地下シェルター検討を。

１．昨今、医療技術の進歩や栄養事情の改善により健康寿命も延びており、人生100年時代と言われている。厚生労働省の生活習慣病予防のための健康情報サイトでは、健康寿命延長のための提言を行っている。提言では、自身の健康については「国民一人一人の目標」を、「健康の社会的決定要因」では「公衆衛生目標」を掲げて、「個々の不健康の根本原因となっている社会的決定要因にも目を向け、社会として解決に取り組む」となっている。これに対応したまちづくりをしていくべきと思い、質問する。

①人生100年時代に対応する町の考えは。

②高齢者のコミュニティーはデジタル化を含めどうあるべきと考えているか。

③散歩、ウオーキング、サイクリングなど、交通インフラ利用者が増えているが、対応が不十分と思うがどう考えているか。

２．令和４年10月８日に、北朝鮮のミサイルが日本上空を通過した。そのほかにも何度も日本海に向けミサイルが発射されている。スピードはマッハ６とか７である。既に日本の迎撃ミサイルでは対処できず、強力なレーザー砲でも開発しない限り、防御不可能な状況である。政府では防衛費を増強する方向に動いているが、地下シェルターの話も上がっている。

ここで、町でも地下シェルターについて真剣に考えるべきではないかと思い、質問する。

過去には、丸山や日向地区などに防空壕が掘られており、避難に用いられていた。丸山の地下、新東名の工事用トンネルについては、令和３年３月定例会一般質問（大規模化災害に対応したまちづくりを）にて富士山噴火の対処として提案したが、ミサイル対処としても有効と思われるので、検討してはどうか。

また、備蓄倉庫や役場通信機能の一部、コンピューターのバックアップ機能、見学コースを置くなどして行き来し、フェーズフリーな使い方をすれば日常にも役に立つと思われるが、どうか。

以上。

議　　　　　長　答弁願います。

町長。

町　　　　　長　それでは、堀口恵一議員から、堀口恵一議員から「人生100年時代に対応したまちづくりを」、「Ｊアラート発令時の地下シェルター検討を」についての御質問をいただきました。

初めに、１点目の「人生100年時代に対応したまちづくりを」について、１番目の御質問の「人生100年時代に対応する町の考えは」についてでありますが、日本人の平均寿命は、令和３年現在で男性は81.47歳、女性は87.57歳となっており、国の将来推計では、令和47年、2065年に、男性は84.95歳、女性は91.35歳とされており、今後も徐々に伸びて100歳まで生きられる時代が到来すると予測されております。

人生100年時代では、これまで一般的とされた「学び・働き・引退」という、年齢による区切りがなくなり、高齢となっても学び直しや転職など、人生における選択肢が多様化して、100歳を前提とした人生設計が求められる社会となることが予測されております。このため、国の「人生100年時代構想会議」でも、年齢に関わらない学び直し、多様な形の高齢者雇用、全世代型社会保障への改革など、超長寿社会に関する議論が進められております。

長い人生を、生きがいを持ち、健康に年齢を重ねるためには、運動や食生活など個人の生活習慣や行動要因に対する取組が重要であり、近年では、貧困や職場でのストレス、社会的孤立などによる社会的・経済的環境の悪化が人々の健康水準の低下に強く影響を与え、健康格差が生じる要因となっております。

人々が健康で活動的に長い人生を送ることができるように、社会全体で健康格差の是正に向けて取り組むことが重要であると認識しております。

このため、町では、人生100年時代を見据え、山北町第５次総合計画でも「町民の年齢・ライフステージ等に応じた健康づくり施策や質の高い福祉サービスの提供体制を整備し、健康と福祉のまちづくりを進めます」としております。

今後も、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせることを目標とした「地

域福祉計画」や「高齢者福祉計画・介護保険事業計画」に基づいて、多様化するニーズやライフステージを踏まえた施策を実施してまいります。

次に、２番目の質問の「高齢者のコミュニティーはデジタル化を含めどうあるべきか」についてでありますが、国の情報通信白書では、令和３年度のスマートフォンやタブレットなど情報機器の利用状況について、18歳以下を除いた世代が９割を超えるのに対して、60代では約７割、70代以上では約４割と、高齢者の利用率が低くなっております。

また、高齢者の中でも、現役時代に仕事などでパソコンを使用していた方は、定年後も情報機器を抵抗感なく利用されますが、生活の中で触れる機会の少なかった高齢者の方は、そもそも情報機器を持っていない、利用方法が分からないなど、孤立してしまうことも懸念されております。

デジタル化が進み、多くの高齢者が情報機器やインターネットを活用して、人生や生活を豊かにするための情報を自ら手に入れて、健康状態や生活環境が改善されることやＳＮＳなどにより、地域社会と交流が図られることが重要であり、民間で実施している携帯電話教室などの高齢者向けの情報関連講座をやまぶき学級や介護予防教室などで実施することも検討する必要があると考えております。

近い将来には、高齢者を含むほとんどの人が情報機器を保有し、世代間の情報格差は徐々に解消され、年齢を問わずにデジタル化が進捗すると考えており、時代のニーズに合わせた対応をしてまいります。

次に、３番目の御質問の「散歩、ウオーキング、サイクリングなど、交通インフラ利用者が増えているが、対応が不十分と思うがどう考えているか」についてでありますが、高齢者をはじめ、あらゆる世代の町民が日常的な健康づくりのために散歩やウオーキングなどを行うことは、健康寿命の延伸のための大切な取組でありますが、身近な健康づくりの場として、町道等の歩道を利用される際には、交通ルールや安全に十分留意していただきたいと考えております。

町道等は、車と歩行者の利用を前提として整備しています。必要な箇所には歩道の切り下げを設けておりますが、散歩やウオーキングでの利用を想定して段差解消を行うことは難しい状況です。

このため、休憩するための椅子や、東屋が設置されている既存のハイキングコースや都市公園なども活用していただき、人生100年時代を見据えた健康づくりに取り組んでいただけたらと考えております。

次に、２点目の御質問の「過去には、丸山や日向地区などに防空壕が掘られており、避難に用いられていた。丸山の地下、新東名の工事用トンネルについては令和３年３月定例会一般質問（大規模化災害に対応したまちづくりを）にて富士山噴火の対処として提案したが、ミサイル対処としても有効と思われるので検討してはどうか。また、備蓄倉庫や役場通信機能の一部、コンピューターのバックアップ機能、見学コースを置くなどして行き来し、フェーズフリーな使い方をすれば日常にも役立つと思うがどうか」についてでありますが、今年の10月には、北朝鮮がミサイルを発射し、青森県上空を通過させ、過去に例を見ない頻度で弾道ミサイルを発射するなど、武力をもって日本を含む周辺諸国を威嚇する行動は、国民の生命に危険を及ぼす断じて許されない行為であります。

そのような中、地下シェルターの必要性について考察しますと、日本に対して攻撃を意図する場合、本町がミサイルの標的となる可能性は極めて低いと思われます。

万が一、ミサイルで攻撃または落下するおそれがあるような場合、町民の皆様には、爆風や破片による被害を避けるため、頑丈な建物や物陰、くぼ地に身を隠すなどの緊急要請を実施してまいります。

なお、以前にもお答えさせていただきましたが、丸山の地下空間は、法律による対象地域でないこと、新東名の工事用トンネルについては、構造上等の理由から閉塞する予定であることなどの理由から、現実的に検討の余地がありません。よって、備蓄倉庫や役場通信機器の一部を置くなどの利用方法についても困難であることを御理解願います。

議　　　　長　11番、堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　政府の人生100年時代構想会議の資料によれば、2007年生まれの人の50％の人が107歳まで生きるとなっています。今、15歳の人の半分が107歳まで生きるということです。一応、そういう資料で出てるんですが、そういう認識はありますでしょうか。

議　　　　　長　　町長。

町　　　　　長　　お答えしていただいたとおり、私のほうも、国からのあれで、これから平均寿命がどんどん延びていって、将来的には100歳というようなことも考えなければいけないということで、国のほうでも会議を設けておりますけども、そういった意味では、本当にこれから、本当に100歳というようなことも、現実に、もっと先ですけど、起こってくるんではないかというふうに思っています。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　現在、100年時代というのは、人によって認識が異なるのかと思うのですが、町として、今、人生100年時代と考えるかどうかによって、まちづくりが変わってくるんではないかと思うんですが、町は、今100年時代と考えているか、それとも、今はまだまだ先だよという、そういう認識で捉えてるか、その捉え方について、お答え願います。

議　　　　　長　　町長。

町　　　　　長　　現実的に、山北町は御覧のとおり、ほかの市町村に比べて高齢化率が40%、65歳以上が越えてるというような現状でありますので、予定より早く来るというふうには思いますけども、しかし、ただ単に、来るから、それを何とかしなきゃいけないというようなことではないと思いますんで、やはり過程があると思いますんで、その過程の中で様々なものを、新しい技術も、あるいはそういったものも増えてくると思いますんで、その中で考えていきたいというふうに思っております。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　たまたまなんですけど、先日のテレビで、「鶴瓶の家族に乾杯」の中で、俳優の高橋克典さん、たまたま、ねじ開発者、82歳の方を訪ねたときに、レポーターの高橋さんが少しその方とお話しされた後、「人生100年時代到来です」と言っていました。本人は「成り行きです」と答えられていました。多分、本人にしてみれば、みんな成り行きでという感覚だと思いますが、町としては、先行して考えてみるべきだと思うんですけれども、そういった意味では、町としては100年時代ということで動くということでよろしいんでしょうか。

議　　　　　長　　町長。

町　　　　　長　　単純に、今の状態がベースで、これが100歳まで生きる過程ではないというふうに考えております。

先日も、川崎のほうのあれを見てきましたけども、非常に、例えば、歩けない人に、人工の、そういったロボットを、ＡＩを使ったものが出てきたり、様々な技術革新がどんどん行われてる状態でありますんで、必ずしも今の状態を想定して100歳というふうにはいかないというふうに思いますんで、それなりの、やはり長寿社会というのは、やはり相当の部分を技術で革新していかなければ、ただ単に、平均寿命が延びるだけでは、実際に対応できないというふうに思ってますので、そういったような科学技術の進歩というのがどうしても必要だろうというふうに思っております。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　たまたまですけど、また、天気の日に、田屋敷のほうですけども、玄関前のレンガの歩道脇に、おばあさんが座ってられまして、「ここの歩道、苔で滑らないですか」と私もちょっと声かけて質問したんですね。そうしたら、「滑らないよ」というふうに答えられて、少しして、「私は100歳超えてるんだよ」と話されてました。「ああ、そうなんだ」って。普通の会話をされた方がいられたわけですけども、しっかりしてるんだと思った次第なんですね。

片や、私、少し前にちょっと介護施設の関係もタッチしたことがありまして、そちらの方は、いろんな人が、やはりいるんですけども、やっぱり施設内という、何か閉じ込められた感覚になってしまうというのがありまして、やっぱり外の世界が羨ましいと思ったりすることもありまして。そういった状況がありますんで、町で、やっぱり高齢に、元気でいられるという状況をつくり出してくるという考え方でよろしいでしょうか。そういったほうがいいんじゃないかなと私は思うんですけども、町長のお考えを聞かせていただきたい。

議　　　　　長　　町長。

町　　　　　長　　私は会計事務所におりましたんで、90歳までの方とか、100歳に近い方も、たくさん相続とかをやりましたけども、これから考えていかなきゃいけない

のは、そういった権利関係とか、そういったものが、扶養関係が、ものすごく複雑になってくると思います。

おそらく、今は離婚して再婚したり、あるいはお子さんも、両親が違ってたりというようなことは、これから非常に多くなってきているという中で、当然、100歳まで生きる人生を考えたら、社会で支えなければいけないというふうに思いますので、そういったものの法的な、いろいろなものが構築されないと、今までの家族構成などでそれを支えるということが非常に難しい。

例えば、100歳というふうになりますと、お子さん、お孫さん、ひ孫さんまでいらっしゃいますよね、多分、通常であれば。そうした人たちの権利関係はどういうふうになるのか、扶養義務はどちらなのか、そういったことを、やはり皆さんで考えていかないと、なかなか難しいんではないかというふうに思いますので。これはやはり我々に課せられた大きな宿題だというふうに思っております。

議　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　口　　また、たまたまなんですけど、また聞いた話なんですけれど、あるおばあさんの話なんですけども、旦那の面倒をずっと見てきて苦労してきたと。苦労してまで、そんなに長生きしたくないよと、元気なんで笑ってるんですけれども、そういう言葉を言われたんですね。やはり、いろんなところに苦労もあるということで、そういったのを町がどこまで対応できるのかというので非常に疑問なところもありまして。先ほども経済的な問題とか相続の問題というふうに言われてましたんで、そういったもの、もろもろ含めて、解決していかなきゃいけない課題だと思いますけれども、いま一度、町長の思いみたいなのがありましたらお願いいたします。

議　　　　長　　町長。

町　　　　長　　どういうふうに想定すればいいか、正直な話、今までのは単に、長生きして90までお生きになったとか、そういう、たまに100歳までの方がいらっしゃるという想定ですけど、これからの時代は、生まれたのはどこどこで、何歳かでやってきて、山北に、例えば、ついの住みかとして住まわれたと。そういうような想定が、これから当然多くなるわけですよね。移動も非常に多くなるし、介護施設等もなってきます。

ですから、その中で、山北町として、100歳の方をどういうふうに、一緒になって社会生活をしていくかというのは、非常に、我々としては、家庭の問題でいろんなことが想定されるんで、そういったことは、これからも実際にそういう場面を少しずつ経験しながらやっていかなければ、単純にこうだろうというような、今までの経験だけで済むような100歳時代ではないというふうに思っておりますんで、そういったことは随時、調査して、また、研究していきたいというふうに思っております。

議　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　おそらく、多分、成り行きですということになろうかと思うんですが、社会全体で健康格差の是正に向けて取り組んでいくことが重要と認識していますということで、多様化するニーズに合ったライフステージを踏まえた施策を実施してまいりますという御回答ですんで。ぜひ、よい方向へ持っていけるようにお願いいたします。

このとおり、進められるということでよろしいでしょうか。

議　　　　長　　町長。

町　　　　長　　お答えさせていただいたとおりでございますけれども、いろいろな対応はしなければいけないことについては、それぞれの時代に合った、そういった対応をする中で、対応していただきたいというふうに思っております。

議　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　次、２番目の質問ですが、コミュニティーという言葉が前の方の一般質問でも出てきますが、コミュニティーの形成が、結構、重要なポイントになると思うんですが、リアルとデジタル、両方が必要な時代になっていて、リアルのほうは、かなり、お祭りなり、イベント、教室ということで、実際、いろいろやられて、デジタルのほうについては、いろいろ教室をやるということでお答えいただいたんで、そういう方向に行ってるかとは思うんですが、なかなか、このリアルに参加するのが抵抗がある方もいられるようでして、それも、一つの問題だなと思いまして。ここで一つ提案なんですが、ちょっと散歩がてらに出たときに、町に、そこら中に町の掲示板があるかと思うんですけれども、あそこがやっぱり、もう道にぴったりついてたりだとかして、あまりそこに立ち寄っていられないような形になってるんですけど、スペー

スの関係でそうなってるかと思うんですが、ちょっと二、三人、立って見てられるというふうになってると、そこが一つのコミュニティーになるのかなと思って。

　ですから、町の掲示板を、あまりコミュニティーという意識がなくて、通りがかりで見てるという認識だと思うんですけれども、そこが二、三人立ち寄れるコミュニティーというふうな考え方というような、方向というのはできないんでしょうか。

議　　　　　長　　町長。

町　　　　　長　　掲示板がというようなことをおっしゃりましたけども、いろいろな情報を伝える中での掲示板とかそういったものでございますので、そういった意味では、いろいろな、例えばシェルターであるとか、そういったようなものも含めて、やはり国のほうの、例えば建築基準法とか、様々なものをある程度駆使しないと、そういったようなものが町単独では、なかなか難しいというふうに思っております。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　あまり難しい話じゃなくて、掲示板のところに、ちょっとスペースがあれば、そこで立ち止まって、会話ができるというコミュニティーが生まれるんじゃないでしょうかというお話ですね。

議　　　　　長　　地域防災課長。

地域防災課長　　この各地域におけるコミュニティー掲示板の移設等に関しましては、いつでも御相談に応じますので、地域防災課までお越しいただければと思います。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　質問してるのは、具体的なやり方ではなくて、そういったコミュニティーの一つとして、そういったものができるんじゃないかと思うんですが、それについては、掲示板があって、三、四人、ちょっと立って見るという状態ですね。１人で通りすがりで見ていくというのは、ここも道路だから通って横目で見ていくという状況じゃなくて、ちょっと止まって見るという、そういうふうに変えていったほうが、ちゃんと掲示板が見られるし、また、二、三人で見てれば、ハイカーもそうですけども、当然、ハイキングで来た人も一

緒に見られるとか、そこが一つのコミュニティーになるんだと。コミュニティーの形成が難しいというような話が毎回出てきまして、要するに、そういったところで顔合わせしてるとか、話をしてとか、そういうのが意外なつながりになるものですから、ひとつ考えてみてはなと思ったんですが。

場所によって、どうしてもスペースが取れないところがあるかもしれないんですけれども、多分50センチ、70センチあれば、立って見られるのかな。

結構、実際には、結構、ぎりぎりに立ってるような現状でして、それを地域要望で出していくものなのかと言われると、ちょっと違うものだと思って。もともとの考え方が、要するに、コミュニティーとして、まだ見る側が複数人数、または立ち止まって見るという前提になってないんじゃないかという指摘であります。それについて、どうでしょうか。

議　　　　長　地域防災課長。

地域防災課長　各地域のコミュニティー掲示板につきましては、運用・掲示物等々は、自治会さんのほうにお任せをしてございます。より魅力的なポスターだとか、いろんな掲示物を貼っていただいて、町民同士、声をかけ合って、一緒に見ていこうよといったような御活用をいただければというふうには考えております。

議　　　　長　堀口恵一議員。

11　番　堀　口　今のお話で分かりましたので、基本的には自治会のほうから、やっぱり要望を出していくというのは基本かと思います。

ただ、大枠として、町のほうでも、そういったものがある程度、方向性として、コミュニティー形成を生むかという認識を持っていただきたいという趣旨で、ちょっとお話しさせていただいた次第です。

それから、現在、デジタル化の関係ですけども、花火大会、または丹沢湖マラソンにしても、どうしても、公共の場所でやってると、ひきこもりじゃないけど、家で入っててあまり外に出ない人というのは、そこまで行って、なかなか見ないものですから、せっかく税金、払ってるのに、スマホも持ってないし、分かんないとなっちゃってると、税金、払ってるんだけど、損してるわけですね、やっぱりある意味ですね。

そういった意味で、そういったものを、先ほど、前回、デジタルデバイド

のときにもお話ししましたけれども、掲示関連の一部をデジタルパネルをという話もしたわけですけども、予算が当然、そんなものつけられないよという話だったと思うんですが、結局、いろいろ手間を考えると、観光とか、そういう情報伝達の手段、また、コミュニティーの場づくりというのにはつながってくるんだと思うんですね。ですから、掲示板に限らず、ふれあい交流館ですか、いろんな施設がありますから、何かイベントやったときに、結構、大きなパネルを買ったりもしてますから、そういったところでライブ中継するとか、近所だったら見に行くよという人も、多分いるかと思うんで、そういった配慮みたいのは、今後、考えてみてはどうでしょうか。

議　　　　長　　地域防災課長。

地域防災課長　　いろいろな、ＳＮＳだとかそういったものを使って、広く町の外にも発信できるような設備として、十分ではございませんが、町のほうでもツイッター、それからインスタグラム、そこら辺を用意させていただいております。動画まではいかないかもしれませんけど、今、最近では、やはり各所管課におきましても、動画なんかもライブ配信できるような準備も整っておりますので、各所管課で様々なイベントをＰＲする意味で周知を考えていただこうかというふうに、庁内では周知してまいりたいと考えております。

議　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　口　　今のデジタル化の話は、確かにいろいろやっていただいてるところもあると思うんですが、現実にスマホがまだ使えないとかいうレベルのところの人でも、近所の掲示板は歩いて見に行けるとか、全く手段がない人でもタッチできるというので、ふるさと交流館、ちょっと行ったら見られたよとか、そういったのが、結構フォローになるのかなと思うわけでありますが、どうしてもデジタル化で１回配信すれば、それでデジタル配信したでオーケーなような感じもするわけですけれども、いわゆるデジタルデバイド化の話、含めると、そういったリアルな場所というのが、意外とそこへ行った場合には、別の人も来てたとかで、コミュニケーションが、要するに、どこの場所でも、仕事をこなすんだったら、お決まりの仕事をこなすんだったら、デジタルでばんばんやっちゃえばいいということになるんですけども、リアルなコミュニティーがないと、今度はそのデジタルは本当かという話が出てきちゃうわ

けですけど、少しでもリアルがあれば、ああ、これ、本当だというのが分かるんで、ある程度、どっか行ったら、何も持っていかなくても見られるよという、そういう場が重要じゃないかなというふうに思っているところでありまして、そういったリアルの場の、何もない人でも、デジタルの恩恵が預かれるということについて、ような仕組みがすべきじゃないかということについて、どう考えますでしょうか。

議　　　　　長　　副町長。

副　　町　　長　　すみません、何をお聞きになりたいのか。それから、自分の考えは提案なのかと、何を提案されたいのか、それをはっきり言っていただかないと、ちょっと我々も答えようがないということで、その辺をお願いします。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　分かりました。説明が下手で申し訳ありません。

もう一度、御説明いたしますと、具体的には、例えば交流館とか学習センターもありますし、いろんな町の施設がありますけども、例えばそこの町の一部を開放して、そこに掲示板があって、デジタル掲示板があって、例えば、ライブでも花火が見られるとか、ライブでもマラソン大会が見られるとか、そういった手ぶらで来てる人、もともと何もデジタルツールを持ってない人でも、遠隔の、丹沢湖のほうでやってるのも享受できるということにしないと、何も持ってない人がデジタルデバイドのために恩恵を預かってないという損を生じてる人がいますので、損しないようにしてやんなきゃいけないんじゃないかなということで。そういったデジタルデバイド対応という意味でも必要じゃないかなということです。

まずは、あとは、そういった場を、リアルな場ということが、コミュニティーの元にもなるという考え方ですけども、ある意味、提案といいますか、今、世の中、一般的に、かなり遠隔ビデオみたいのは流していたりとか、やってるのは観光地なんかでも結構あるかと思うんですけども、なかなか予算的にということでしょうけど、あるものを利用して何かできるんじゃないかなという気はしてるんで、ちょっとリアルタイム配信的なものを、ちょっと、実際のマラソン大会、花火大会とか見られれば、近所の人もちょっと行って見れるとか、そういう流れをつくってあげるというのが一つかなと。

議　　　　　長　　地域防災課長。

地域防災課長　　おそらく、パブリックビューイング的なことをおっしゃってるんじゃないかと思うんですけど、現地で何かが行われているものを、どこかでそれが見られて、楽しめるといったような、おそらくパブリックビューイング的なものをおっしゃってるんじゃないかと思うんですけど、それにつきましては、先ほども言いましたとおり、各所管課で必要なときに配信をしていただいて、別の場所でも見れるようなサービスをしていければというふうに考えています。

　それらの常設化につきましては、ちょっと今後の課題とさせていただければと思います。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　やはり必要性というか、有効性が、多分、認識されたんだと思われますんで、ぜひ今後、対応していく方向で、ちょっと検討願います。

議　　　　　長　　続いてます。堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　３番目の質問ですけども、「散歩・ウオーキング・サイクリングなどの交通インフラ利用者が増えているが、対応が不十分と思うがどう考えているか」で回答を見ますと、できるところはやってるという感じなんですけれども、今後も、今現在でもそうですけど、シルバーカートを引いてる方もいられますし、電動カートの方も実際、走っておられますし、また、今現在だと、宅配のＡＩロボットを許可されて、遠隔でコンビニかなんか配達するとかいうのも出てきてまして、歩道の意味合いが、結構、重要になってまして。ある程度、用地買収してでも、歩道を拡幅して、ある程度、流れをつくるというのがやっていくべきではないかと思うんですが、単にバリアフリーという話だけではなくて、歩道のバリアフリー化、さらに、自動宅配のロボットとか、ある程度、平らであれば動きやすくなるので、しかも、また、歩道については、狭くてかなり危険な場所も、かなりあるわけですけども、どうしても用地を買収しなきゃいけないとか、余計な話がいっぱい出てきちゃうので難しいかと思うんですが、「用地買収してでも歩道を拡幅していくべきと思うが、どうか」について、お答え願います。

議　　　　　長　　都市整備課長。

都市整備課長　歩道につきましては、安全にこしたことはないんですけども、昨年度ですかね、駅前のほうの道を自治会要望もありまして、マウントアップしてる歩道を、バリアフリーじゃないですけども、今セミフラットというんですか、本来、今現在、セミフラット形式の歩道というのが主流になりつつあります。

うちのほうも、できればそういうふうにやれるところは、要望もありますけども、やっていきたいなとは考えてますけれども、今、議員さん、おっしゃられるように、用地買収してまでやっていくことは、なかなか難しいところもありますけども、検討して、計画的にやれればなと考えています。

議長　堀口恵一議員。

11番堀口　町長としては、この用地買収までしてやるという考え方はどうでしょうか。

議長　町長。

町長　当然、そこまでしてやるようなことは、私は考えておりませんけど、私も朝早くいつも起きてやってますけども、見てると、犬の散歩をなさる方、あるいは自分の健康のために歩かれる方、そういった方が非常に山北町は多いです。おそらく、その時間帯でありますと、交通量も非常に少なくて、普通に歩道でなくても、何とか大丈夫というようなこともありますし、やはり皆さんの、自分の趣味とか健康のためにやってらっしゃることですんで、やはりいろいろ御自分で考えていただいて、やっていただければ、町としては、当然、買収しなきゃいけないところもあるかもしれませんけど、そういったような用地買収までしてまで、歩道の整備というようなことは考えておりません。

議長　堀口恵一議員。

11番堀口　前の方の一般質問でもお話がありましたけども、水上地区とか、公園化してというような自然を生かしたものという話も出ましたけれども、散歩で歩いていて、散歩休憩椅子ですね。要するに、散歩してて、ちょっと休める場所というんですか、もし、公園化とか遊歩道というか、歩道を要するに歩くということを考えますと、そういう設計の段階から入れ込めば、もしかしたらそういうふうに、同じ散歩でもちょっと休み休み回れるというか、そういったちょっと話も出てましたので、ちょっとスペースがあって、ところどころ休める場所があれば、散歩するのに、また、気分転換しながら歩けるとい

う話もちょっと聞いてまして、そういった話、要するに、ある意味、町内にそういう散歩コース、プラス休憩スペースというんですか、そういった考え方の方向にいろいろ結びつけてくという考え方です。そういった場所が、またコミュニティーにもなったりとか、ということにつながるんじゃないかと思うんですが、そういった考え方について進めるというか、要するに、昔だったら、そんなに交通量がなかったから、普通にどこでも歩いて行っちゃうという形なんですけど、今だったら、いろいろ制限があると、やっぱり危ないところありますから、安全な道を行って、休める場所があったりという、そういう、ちょっと公園化したようなイメージで、土地が安いんであれば、そういったことも比較的やりやすいのかなと思いまして、ちょっと提案ですけども、どうでしょうか。

議　　　　長　　町長。

町　　　　長　　山北町は非常に広いし、例えば安全なところは、例えば、河村城址とか、いろいろなハイキングコースも設定しております。ですから、そういったような安全なところを選んでいただいて散歩していただくなり、ウオーキングしていただくのは結構だというふうに思いますけども、一部の人のために、何か休憩所であるとか、様々なものを町の税金を使ってやるということは、今のところ考えておりませんので、また、そういう必要性ができたときには、また考えさせていただきたいというふうに思っております。

議　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　次に、２番目の２の１の質問ですね。ミサイルのシェルターをという、どうかという話ですけど、回答は極めて可能性が低いというお話で返ってきたわけですけども、昨今の新聞を見てますと、昨日もそうですけども、やっぱりミサイルが来てまして、反撃拠点がやっぱり新聞に出てたんですが、沖縄と富士山周りと北海道ということで、沖縄は1,600メートルかなんかで、富士山周りのところが2,000キロ飛ぶやつで、北海道は3,000キロとか何とかで、これから開発するとかという話にもなっているようなんで。富士山周りというのは、結構、強力な攻撃拠点という認識だと思うんですね、この新聞から見るとですね。

東京とそこを結ぶ重要な物流ラインというところ、東名高速が非常に物流

としては重要なルートなわけですね。本当、普通考えたら、道路の端とか、狭いところを狙うわけですね、例えばですね。そうすると、例えば、この山北なんか、狭まって谷になっていれば、壊しちゃえば、非常に機能麻痺するよとか、そういうことも考えられますんで、必ずしも極めて可能性が低いというのがどうかというのはあるわけですけども。自衛隊ではどうなってるかというと、ちょっと現在、配備が地上に置いてあるんで、地下化を進めてるわけです。配備の地下化というのは挙げてます。

それから、東京では、新規の地下鉄を申請し始めてますね、ビッグサイトへ向かう地下鉄ですか、それも結局、地下の避難所ということですよね。あと、空港、湾港の再整備とか、そういったことで、今ちょうど、議案の真っ最中で、だんだんまとめていくわけですけども、基本的に、今までと意向を変えて反撃能力を持つ方向で話が進んでいまして。ただ、なかなか、この問題というのはナイーブな問題で、なかなか話しにくいわけなんですけども、今国会では、今までと方向転換して、反撃能力（敵基地攻撃能力）を持つ方向で話が進んでいる。

しかし、予算、43兆円掲げて、５年間でということなんですけども、ちょっと見ていると、十分な反撃能力を持つに至らない。ちょっと非常に中途半端な感じなんですけれども。それで、要するに、危機が、どうも収める方向じゃなくて、どうも逆方向に動いちゃっているように、私は感じてるわけなんですけれども。そういった状況で、Ｊアラートの話だけは下りてくるわけですね。で、県でも町でも、Ｊアラートの、県は具体的に頑強な建物または地下へ逃げてくださいとなっておりますけど、町のほうでは、Ｊアラートの通報訓練、通じるかどうかの確認だけだったと思うんですね。で、具体的に、頑強な建物・地下というと、ないこともないわけですけども、なかなか、書いてあるとおりできないということだと思うんですけども。この県で書いてる頑強な建物や、または地下へということで対応して、町としては具体的には……。

議　　　　　長　　堀口議員、質問を、要項をまとめて、簡潔にお願いいたします。

11　番　堀　　口　　具体的な逃げ場をどういうふうな想定をしているかということです、聞きたいところは。Ｊアラートが鳴ったときにですね。Ｊアラートが発令された

ときに、具体的にはどういった形の避難になりますでしょうかという質問です。

議　　　　　長　　地域防災課長。

地域防災課長　　万が一、ミサイルで攻撃または落下するおそれがあるような場合、町民の皆様には、爆風や破片による被害を避けるため、頑丈な建物や物陰、くぼ地に身を隠すなどの緊急要請を実施するしか、今の現状ではないかというふうに考えております。

　これをがっつりと放送なり何なりして呼びかけるしかないというふうに。頑丈な建物、どこですかと言われても、なかなか、山北町、ビルとかいったものがございませんので、できるだけ頑丈な建物と思われるところへというような御案内になろうかと思います。

議　　　　　長　　堀口恵一議員。

11　番　堀　　口　　最後に、ちょっと国会の動きが、要は、今まで反撃能力を持たないほうで来てたのが、持つ方向で進んでいるわけですけども、国が反撃能力を持つことによる町への影響について、町長の見解をお聞きして、終わりにしたいと思います。

議　　　　　長　　町長。

町　　　　　長　　普通に、今のウクライナのあれを見ていますと、なかなか山北のようなところにミサイルが撃ち込まれるということはあまりないんだろうというふうに思いますけど、仮に、そういうようなミサイル、Ｊアラートで来た場合には、私もスイスで見ましたけど、ほとんど大きなアパートの地下に、そういったシェルター、スイスは全部ありますので、そういうのが作ってあります。

　しかし、中を完全に見たわけではございませんけど、要するに、今、言ったように爆風を避ける、あるいは、瓦礫が落ちてくるのを防ぐというような自分の身を守るというようなシェルターでございますんで、それ以外のものもあるとは思いますけど、私なんかが見たところは、そういう、つまり、実際に撃ち込まれたときは遠くに逃げらんない、ですから私が自分の身の近いところで、爆風とか、そういうのを避けるというようなことになると思いますので、そういった意味で、山北町では、なかなかそういったようなところが少ないわけですから、やはり頑丈な建物とか、鉄筋コンクリートのところ

に、避難するというとこしか、今のところはないんだろうというふうに思っております。

11 番 堀　　口　　終わります。